

歴史教育におけるエスノセントリズムとの対峙(2)

ーナチスの漫画教科書の教材化を中心にー

高 橋 健 司

はじめに

1 教材化の視点

(1) 過去の実践から

ーホロコーストから学ぶ意味とはー

(2) 新たな教材化に向けて

ーナチスの漫画教科書との出会いー

2 教材化の問題点

(1) ホロコーストに至るプロセスの軽視

(2) 「よそ者」の創出という視点の欠落

3 教材の作成

(1) アンネ・フランクの証言

(2) エルヴィラ・バウアーの描いた漫画教科書

(3) シュトゥルマー新聞に投書された子どもたちの声

(4) ナチスの教育政策

(5) ホロコーストの論理

(6) ヒトラー・ユーゲント体験者の回想

4 授業「ナチズム下の子どもがみたユダヤ人」の展開

(1) アンネのみたナチスの迫害

(2) バウアーが描いたユダヤ人とドイツ人

(3) シュトゥルマー新聞とナチスの教育

(4) 優生思想とエスノセントリズム

おわりに

平成13年度宮田研究奨励金の交付を受けた。

はじめに

新たな世紀と共に迎えた混沌を極める世界情勢の中で、今後ますます「異文化との共存」の道を模索する必要性が高まってきている。しかし、それは「共存・共生」の美辞麗句を並べて解決できる程、容易な問題ではない。

私は過去において実際に起った文化摩擦、異なる価値観の対立といった諸問題の中にこそ学ぶべきものがあると考えて、これまで高校・大学で実践を行ってきた。そして現在、特に20世紀の歴史・現代史に焦点を当てて教材化に取り組んでいる。

その具体例として、昨年は日本統治下の朝鮮を事例に、教材化して研究報告を行った。⁽¹⁾ この中で強制的な「異文化の同化」、すなわち日本の同化政策を正当化しようとする論理とは、結局のところ自民族中心的な異文化に対する眼差しであり、それに対し浅川巧や柳宗悦など少数の日本人は「卓越した民だと妄想」することの「醜さ」を感じ、「恥」「不遜」と捉えられたにもかかわらず、大多数の日本人にとっては何らの痛みを伴わない事柄であった。

現在でも「誇りの回復」と称してそれを省みようとしないのは、エスノセントリズムが依然として克服できていない前世紀からの課題であることを物語っている。

そして今回ナチズムを取り上げたのは、「異文化の排除」について考える必要を感じるからである。例えば1990年代の旧ユーゴスラビアの紛争において、それまで隣り合って暮らしていた民族を異とする人々が、「民族浄化」によって血で血を洗うような抗争を繰り返す姿を目にした時、ナチズムの忌まわしい記憶を思い出さずにはいられない。この排除の論理を正当化す

るのもまた自民族中心的な思考であり、ナチズムの負の教訓が何ら生かされてはいない。

世界が急速にグローバル化していく一方で、異文化を巡る相克は深刻の度合いを深めている。それゆえ今、ナチズムの学習を通してエスノセントリズムに囚われることの危険性を再認識することは、意味あることではないのだろうか。

1 教材化の視点

(1) 過去の実践からーホロコーストから学ぶ意味とはー

最近、日本人がホロコーストを学ぶ意味はあるのだろうか、という否定的な懐疑を唱えるものを目にするようになった。例えば「新しい歴史教科書をつくる会」の坂本多加雄によると、日本には反ユダヤ主義など存在しないし、人類史の上での普遍的な重要性を持つということは「一般論」として理解できるとしながら、「ナチスの犯罪はあくまでドイツの歴史やヨーロッパの反ユダヤ主義の歴史に即してその意味を考える」ことが重要であり、ホロコーストから平和や人類普遍の問題を学ぶことは、日本とドイツを「一緒くた」に論じる「思考の怠惰」を招きかねないと主張する。⁽²⁾

坂本には「虐殺と戦争との混同」、すなわち「ホロコーストを学ぶ＝戦争の残酷さと平和の尊さを学ぶ＝ヒロシマや南京での悲惨な出来事を知ることにつながる」という構図が我慢できないらしい。私はこうした平和学習のスタイルとは別の角度から、主に高校生以上を対象としてホロコーストやナチズムの学習を通して学習者の思考力を問う授業が展開できるのではないかと考えている。

私自身がこれまで高校の授業で取り上げてきたのは、ホロコーストの従事者たちである。具体的にはアドルフ・アイヒマンに代表されるナチスの実行責任者、そして1985年に制作されたドキュメンタリー映画『ショアー』において証言を行った、ユダヤ人の強制収容所への輸送を担った鉄道関係者など、ホロコーストを支えた一般市民である。私がこうした人物に焦点を当てたのは、いずれの場合も彼らの本音と建前とのずれが、かい間見えたためであった。すなわち、本音の部分では自らの行為が良心に照らして非人道的なものであることを知りながら、それでも組織に対する忠誠心とか仕事としての義務感という大義名分に従って、命令を忠実に実行し得た点を問題にしようと考えた。言い換えるなら、「正しくないことと知りながら、それを実行できたのはなぜか」という視点から教材化を行った。⁽³⁾

そしてその答えを、1941年にナチスに盲従する大衆心理を「近代人の性格構造」の問題として提起した、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』や、1963年にアメリカの社会心理学者スタンレー・ミルグラムが、人間の「権威への服従」志向を科学的に証明しようとした「アイヒマン実験」をもとに探求した。ミルグラムによれば、「良心と権威との対立が提起するディレンマは、社会の本質そのものに内在しており、もしナチ・ドイツがかつて存在したことがなかったとしても、われわれとともにあるであろう。この問題をあたかも歴史上のことに過ぎないかのごとく扱うなら、その問題をわれわれから理由なく遠ざけてしまうことになる。」⁽⁴⁾と警告を発しているように、ナチズムに見られる権威に対する服従の問題は、現代社会に通底する問題を含んでおり、単に歴史的過去や事実を知るだけの学習では不十分である。

これに対して、坂本はハンナ・アーレントの著作『イェルサレムのアイヒマン』の中のナチス親衛隊長官ヒムラーの言葉を引用して、ホロコース

トを「イデオロギー的な確信犯による想像を絶した犯罪であることを物語って余りある」と断定するが⁽⁵⁾、アーレントの主張はその正反対のものであり、アイヒマンの裁判を通して明らかになった彼の「無思想性」や「上からの命令」に忠実であろうとした「悪の陳腐さ」を問題にしている点は、フロムやミルグラムに通じるものである。

このように、ナチズム下の人間の心性に対する研究は、責任の追求とは別の次元で、ホロコーストをドイツ史の枠内に矮小化せずに、人類共通の課題たり得る、現代社会に生きる人間の良心の問題として捉えることの必要性を提起している。それは同時に「悲惨」「残酷」「狂気」という言葉を用いて、ホロコーストを非日常の異常な問題として片付けるのではなく、我々にも理解可能な人間の心理として（容認するのではなく）、どこまで日常世界に近付けて考えられるかが問われており、それがホロコーストを通して思考するということではないかと考える。

安易な類推は避けなければならないが、実際に授業を受けた当時の高校生の多くが、ホロコーストの従事者に見られた心理と、地下鉄サリン事件におけるオウムの実行者たちの心理とを比較して、その共通性を指摘したことは、私自身アーレントやミルグラムの主張が、いかに説得力を持っているかを改めて認識することになった。

（２） 新たな教材化に向けて－ナチスの漫画教科書との出会い－

今回新たな教材化を考えるきっかけとなったのは、一冊の絵本（漫画）との出会いであった。それはアメリカ、ワシントンD.C.の国立ホロコースト記念博物館のライブラリーに収蔵されていた“Trau keinem Fuchs auf grüner Heid und keinem Jud bei seinem Eid” (Don't Trust a

Fox in a Green Meadow or the Oath of a Jew、緑の原野の狐なんて信じるな！ 宣誓をしたって、ユダヤ人なんて絶対に信じるな！）というタイトルの、1936年の出版とは思えない鮮やかなカラー印刷の美しい本である。そしてこれはナチス体制下のドイツの初等教育用の教科書（厳密には副読本）として推薦されたものであった。

この中では、まだホロコーストが「最終解決」として本格化する前のドイツの日常社会を舞台に、金髪で美しく逞しく健全なドイツ人を、騙し誘惑し陥れようとする不健全なユダヤ人が描かれ、ユダヤ人のドイツ社会からの追放のメッセージが込められている。

出版当時、この漫画の持つ影響力に危機感を抱いた人物は多くはなかったが、トーマス・マンの娘でドイツに生まれ、ナチスの迫害をのがれて亡命したエーリカ・マンは、1938年にアメリカにおいて出版した“School for Barbarians. Education under the Nazis”の中で、このバウアーの本を「鮮やかな赤のカバーに描かれた、題名の下の子の二つの絵が目に入る。片隅で陰険に、獲物に飢えて様子を窺っている狐とダビデの星の下にいるユダヤ人である。それは、ナチ・ドイツで誰もが知っている、太った手で偽りの誓いをするユダヤ人の劇画—大きな鼻、ハゲ、厚ぼったい唇、ただれ目—である。この子ども読本は豪華な装丁で、色とりどりのイラスト入りで、しかも文字は二色刷りである。著者にとって大事な言葉、すなわち『悪魔』、『ユダヤ人』、『垂れ下った口』、『ならず者』等は、子どもたちが忘れないように、そのつど赤色で印刷されているのだ。このような詩句のいずれもドイツでは必ず翻刻され、これらの絵も必ず複写される。それというのも、ここで表現されているようなサディスト的な粗暴さ、虚偽的な扇動、悪趣味および人間的墮落をこれ以上うまく描写し、具象化するのは困難だと思われるからであろう。」⁽⁶⁾と、作品としての完成度の高さと

その危険性について警告を発していた。

この偏見に満ちた漫画教科書を用いた授業実践を、アメリカのニュージャージー州の高校教師メアリー・ミルズは、1999年10月にイスラエルのヤドバシェム（国立ホロコースト記念館）において開催された第二回国際ホロコースト教育者会儀において、“PROPAGANDA AND CHILDREN DURING THE HITLER YEARS”⁽⁷⁾と題して研究報告を行っている。

この中で彼女の教材化の視点は、いかにこの本が巧みにユダヤ人に対する負のイメージを植え付け、反対にドイツ人の優秀さを確信させるかというプロパガンダの恐さについて、授業を通して高校生に注意を喚起させようとするものであった。

しかし私には、この本に描かれている楽しそうにユダヤ人を学校から追放するドイツ人の子どもの姿など（図5参照）、内容の恐さとは対照的な明るさや無邪気さすら感じられ、この奇妙な感覚を探求する中で、これを描いた作者がエルヴィラ・バウアーという、当時まだ18才の美術を学ぶ学生であったことを知り、この漫画教科書に描かれたのは、ナチスの思想に共鳴したドイツの青少年の理想的世界観ではなかったか、と考えるに至った。

もちろんこの本がプロパガンダ目的で出版されたことは、出版元がナチスのプロパガンダ新聞であるシュトゥルマー（前衛、突撃兵）新聞社であることを見れば疑いようがない。しかし、私にはバウアーが注文に応じてこの本を渋々描いたとは到底思えない。マンも指摘したとおり、作品としての質も高く彼女の絵の才能が存分に発揮されている。それこそ「イデオロギー的確信犯」でなければ、こんなに生き生きと物語を描くことは不可能だったのではないか。残念ながらバウアーに関してはこれ以上の情報がなく確証に欠けるが、当時のドイツの青少年の中には、積極的にナチスの掲げる理念に共感を示した例が少なくないのではないだろうか。絵の中に

登場するような、ユダヤ人を追い払うことに何ら躊躇しないドイツの少年少女は、実在したのではないだろうか。

それをプロパガンダによって「踊らされた」と捉えるのか、自らもまた「踊ってしまった」と捉えるのか、責任問題も絡み解釈が分かれるところだと思うが、ドイツの青少年が「何に踊ってしまったのか」を考えることは、単にプロパガンダの技術的な問題としてのみ考えるのではなく、彼らの「民族の誇り」を覚醒させた、自民族中心的な世界観に埋没してしまうことの「心地よさ」や、人間としての良心的判断よりも優先される「理屈」とは何かを明らかにしようとすることである。言い換えるならば、「悪事を目の当たりにしても、それを悪事と認識できなかったのはなぜか」という視点からの教材化が可能ではないかと考える。

ただし私がここで問題にしようとする「悪事」とは、ホロコーストという行為そのものではない。むしろそこに至るまでにドイツの日常世界で繰り広げられたユダヤ人に対する迫害のプロセスに焦点を当てようとするものであるが、従来それは十分に注意が払われてこなかったのではないかと考える。そこで次にこの問題点について述べたい。

2 教材化の問題点

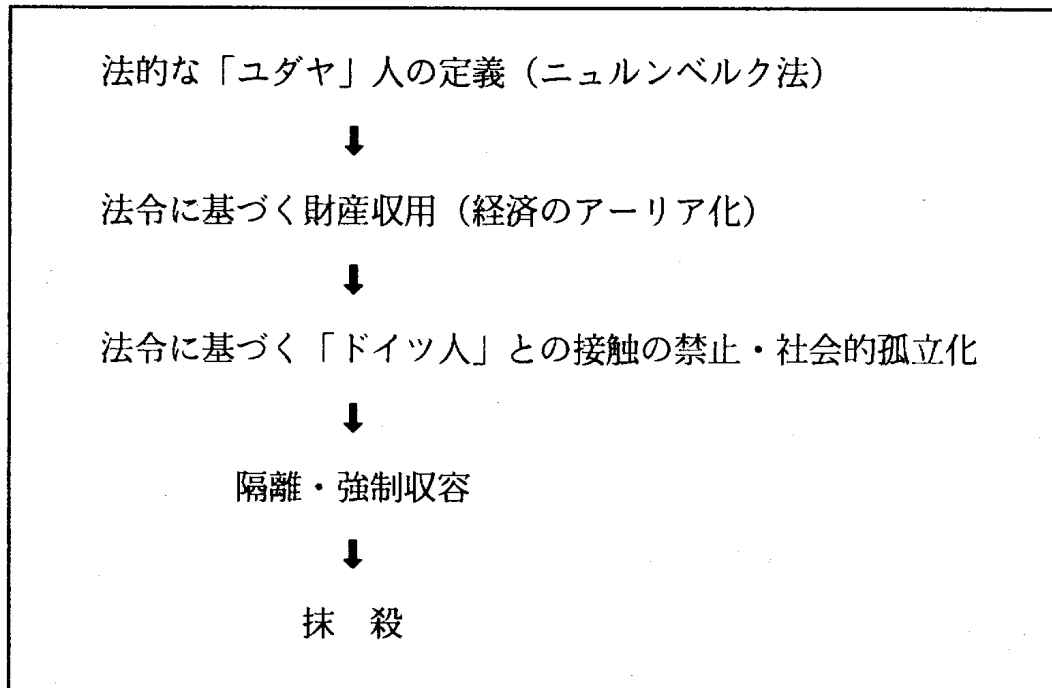
(1) ホロコーストに至るプロセスの軽視

「どんなに恐ろしいことでも、小出しにされるとずいぶん我慢できるものだね。毒と同じで、少しずつ少しずつ体に取り入れて、一滴また一滴と分量を増やしていくと、体はやがて、すっかり慣れてしまう。」これは第二次世界大戦下のオランダで、ナチスの迫害を生き延びたユダヤ人、エディス・フェルマンズの回想録の巻頭に掲げられた、大戦中に亡くなった彼女の父の言葉である。⁽⁸⁾

このようにホロコーストを体験した人々の文章には、ホロコーストに至るプロセスを重視しようとするものが少なくない。にもかかわらず、私たちは結末の悲惨さに目を奪われる余り、その過程に十分な関心を示してはいないのではないか。これではホロコーストの問題点を、強制収容所に限定された非日常的な世界に押し込めてしまうことになってしまう。

アメリカの歴史学者ラウル・ヒルバーグは、大著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』を著し、この中でホロコーストに至るプロセスを詳細に分析している。⁽⁹⁾ これを図式的にまとめたのが図1である。

教科書等でよく紹介される写真は、突撃隊員によるユダヤ人への嫌がらせやボイコット、あるいは水晶の夜（クリスタル・ナハト）事件に代表される組織的な破壊・暴力活動（ポグロム）、すなわちナチスによる非合法的迫害である。しかしこうした党主導の「野蛮」なやり方と並行して、政府機関が主体となって「少しずつ」ユダヤ人問題を「解決」しようとした「合法的」な方法は、絵になりにくいためか見落とされがちである。



〔図1 ユダヤ人迫害のプロセス〕

アメリカの国立ホロコースト記念博物館のホロコースト研究所長マイケル・ベーレンバウムによれば、1933年4月7日に発布されたユダヤ人排斥の最初の法律である「職業官吏再建法」（ユダヤ人の公職からの追放を定めた）から1939年にかけて、400に及ぶ細々とした排斥のための法律が誕生し、1945年の敗戦まででは、その数が2000にも達するとしている。^{（10）}

こうした官僚的な周到性・徹底さに基づいてユダヤ人に対する迫害は徐々に進行・エスカレートしており、それが「最終的解決」の道を切り開いていったと言える。そして合法的であれ非合法的であれ、それは一般のドイツ人が生活する日常世界で繰り広げられたものであり、秘かに行われたわけではない。この点を問題にしない限り、ホロコーストの問題が強制収容所内の問題として狭められてしまい、一般市民とは無縁の問題であるかのような印象を深めてしまう。

(2) 「よそ者」の創出という視点の欠落

エール大学のデボラ・ドワークはナチス支配下のユダヤ人の子どもに対する迫害の過程を研究し、「よそ者というイデオロギー」こそホロコーストの核心をなしたイデオロギーであると位置付け「自分の国でよそ者となり、蔑まれ、権利を失い、最後には殺されるべきものとしての烙印を押されるというのは、いったいどのようなことなのか？ユダヤの子供は、かつて自分も一員だった社会機構、国家からどうやって切り離され、虫けらのように排除されたのだろうか？」という問題提起を行っている。そしてその手法は「今なお人類が互いに苦しみ虐待し合うやり方の一つとして、世界のあちこちで見られる」ものとして捉えている。⁽¹¹⁾

我々は「ユダヤ人」「ドイツ人」という言葉をごく当たり前用い、最初からこの二つには明確な違いがあるものとして捉えがちだが、まずそれを疑ってみる必要があるのではないだろうか。「異質な存在だったから迫害された」と「異質な存在に仕立て上げられて迫害された」とでは、その意味するところが180°違ってしまう。

ベーレンバウムはこの点に関し、「ナチが政権を掌握するまで、ドイツのユダヤ人は快適な生活を送っていた。ドイツ国民として、演劇、芸術、科学、文学、産業など、さまざまな専門分野で活動し、成功していた。一八世紀後半からずっと、ドイツはヨーロッパのユダヤ人にとって、文化と自由の象徴だったのである。社会的には差別があり、就ける職業にも制約があったが、ユダヤ人は、自分たちにはドイツ人としての未来があると信じていた。多くのユダヤ人はキリスト教に改宗しており、さらに多くのユダヤ人は先祖代々の宗教的習慣を捨て去っていた。非ユダヤ人との結婚も珍しいことではなかった。ドイツ語を話し、自らをドイツ人と自負する彼ら

にとって、ドイツは文字通り祖国となっていたのである。第一次世界大戦においても、ドイツのユダヤ人は、祖国への忠誠を行動で示した。人口の六分の一にあたる一〇万人のユダヤ人が出征し、その八〇パーセントが実戦要員となった。三万五〇〇〇人が武勲によって勲章を授けられ、一万二〇〇〇人が戦死した。」⁽¹²⁾と述べ、ユダヤ人のドイツ社会に対する同化がかなり進んでいたこと、多くのドイツに暮らすユダヤ人にとって、彼らのアイデンティティがドイツにあり、自らをドイツ人と考えることに抵抗が少なかったことに触れている。

とすればユダヤ人もまたドイツ人・ドイツ国民であり、安易に「ユダヤ人」「ドイツ人」の区分を用いることは、無意識に異質性を肯定・強調することにもなり、それはまさにナチスが望んだ通りのレトリックに陥ってしまうことになる。

そもそも「ユダヤ人」「ドイツ人」の区分が明確な法律という形で出されたのは、1935年のニュルンベルク法に遡ることができるが、こうした定義を法的に必要としたこと自体、区分が困難であったことを物語っているし、さらにニュルンベルク法を研究した人々が共通して結論付けているのは、ユダヤ人規定の曖昧さである。⁽¹³⁾

ニュルンベルク法によれば、「ユダヤ人」（混血を含む）を規定する基準は、祖父母がユダヤ人であるかどうかであり、では何を以て祖父母がユダヤ人かどうかを判別するかと言えば、結局のところユダヤ教信者であるかどうかであった。

すなわち「ユダヤ人」とは、宗教的異文化を持った先祖を持つ者であり、「ドイツ人」との間に生物学的な先天的違いを示すものは存在しない。（ナチスは後からそれを「実証」することに躍起となっていたが。）にもかかわらず、平気で「ユダヤ人」を「異人種」と呼んで憚らないのは大きな矛盾

である。「人種」という言葉がもたらす「科学的装い」とは裏腹に、そこには何ら科学的な根拠などなく、恣意的で一方的な決め付けがある。結局ナチスは、「文化的異質性を持つと思われる人々」に「異人種」である「ユダヤ人」のラベルを貼ることによって（実際に黄色い星印の着用を強制）、決定的な「よそ者」の烙印を押し、彼らから財産や市民権を奪うことに対する抵抗感を薄め、徐々に一般のドイツ人の目に触れない世界へと追いやることによって本当の「よそ者」に仕立てて、最終的には生存権を剥脱することさえ可能にした。

それゆえ私が問題にしたいのは、かつては同じ国民・市民であり、個人的な人間関係においては隣人・知人・友人であった人々を「よそ者」と呼び、彼らに加えられていく「痛み」に対して、同じ人間として何ら共感することがなかった、罪悪感の欠如・良心のマヒとでも言うべき状況であり、それは大量殺戮の非人道性を糾弾するのとは別の次元の問題として、個々人の倫理的問題として考えていかねばならないのではないだろうか。

3 教材の作成

(1) アンネ・フランクの証言

まず最初に、ホロコーストに至るプロセスに目を向けさせるための教材作りが必要である。ヒトラー政権下のドイツで少年時代を過ごしたドイツ人、ハンス・ペーター・リヒターが著した自伝小説『あのころはフリードリヒがいた』のように、ドイツ人自身がこのプロセスに言及した作品も存在するが、やはり迫害される側からの記録に頼るべきではないかと考える。

そこでドイツ本国ではないものの、ドイツからナチスの迫害を逃れてオランダに移住し、1940年のドイツ占領後に再び同様の迫害を受けたアンネ・フランクの記録を用いたいと思う。『アンネの日記』に関しては、小学生向けのものなど日記を編集して出版された版の方が知名度が高いが、近年になってようやく日記を忠実に復元した『アンネの日記 完全版』が利用できるようになった。これによって歴史の証言者としての史料価値が高まったと言える。実際に引用したのは、1942年6月20日の次のようなページである。⁽¹⁴⁾

「一九四〇年五月からは、いよいよ急な坂をころげおちるように、事態は悪いほうへ向かいました。まず戦争、それから降伏、つづいてドイツ軍の進駐。わたしたちユダヤ人にとって、いよいよほんとうに苦難の時代が始まったのは、このときからです。ユダヤ人弾圧のための法令が、つぎからつぎへと出され、わたしたちの自由はどんどん制限されてゆきました。ユダヤ人は黄色い星印をつけなくてははいけない。ユダヤ人は自転車を持出なくてははいけない。ユダヤ人は電車に乗ってははいけないし、たとえ自家用車でも、自動車を使ってははいけない。ユダヤ人は午後の三時から五時までの

あいだにしか買い物ができない。ユダヤ人はユダヤ人の床屋にしか行ってはいけない。ユダヤ人は夜八時から翌朝六時まで、家から一步も出てはいけない。ユダヤ人は劇場や映画館、その他の娯楽施設にはいることを許されない。ユダヤ人はプール、テニスコート、ホッケー競技場、その他いっさいのスポーツ施設に立ちいつてはならない。ユダヤ人はボート遊びをしてはいけない。ユダヤ人は公共スポーツに加わることは許されない。夜八時以降は、自宅であれ、知り合いの家であれ、庭に出てすわってはいけない。ユダヤ人はキリスト教徒を訪問してはいけない。ユダヤ人はユダヤ人学校にかよわなくてははいけない。そのほか、似たような禁令が山ほどあって、すべてが、これはだめ、あれもいけないと禁じられてるありさま。かといって、毎日生きてゆくのをやめるわけにはゆきません。ジャックはよく言ってたものです。『これをするには禁じられてるんじゃないか、そう思うと、なにをするのにも臆病になっちゃうわ』って。」

アンネの証言を視覚的に訴えるような一枚の写真がオランダで撮影されている。それは3人のユダヤ人の少年がプールの入り口で「ユダヤ人お断わり」と書かれた看板を前に、後ろ手に水着を握り締めて佇んでいるものである。この写真も併せて見せることにより、日常世界で繰り広げられたナチスの「合法的」弾圧がどんなものだったか、「よそ者」にされていくとはどういうことか、イメージし易くすると同時に、写真の奥に映っている微笑むかのようなプールの管理人の表情に注意して、非ユダヤ人・ドイツ人の側からの視線の違いに気付かせることも重要である。⁽¹⁵⁾

(2) エルヴィラ・バウアーの描いた漫画教科書

教材として使用したバウアーの教科書 “Trau keinem Fuchs auf

gruner Heid und keinem Jud bei seinem Eid” は、先に述べた通りアメリカの国立ホロコースト記念博物館のライブラリーから、使用目的を明らかにして取り寄せたコピーである。⁽¹⁶⁾

実物はカラー印刷で、見開き2ページで1話になっており、片側のページに絵(漫画)が反対側のページには文章が載せられている。全部で21話(場面)、42ページで構成されており、表紙は鮮やかな赤地に『緑の原野の狐なんて信じるな! 宣誓をしたって、ユダヤ人なんて絶対に信じるな!』というタイトル通り、ずる賢そうな狐とユダヤ人が描かれている。

日本語訳はアメリカのシーモア・カプラン記念財団ホロコースト資料センターの英語訳をもとに、私自身が行った。なお便宜上それぞれの文章にタイトルを付けている。

この漫画教科書の出版元は先述のシュトゥルマー新聞社で、シュトゥルマー新聞はヒトラーの古くからの盟友の一人で後にフランケン⁽¹⁷⁾の党大管区指導者となるユリウス・シュトライヒャー(図3参照)によって1923年に創刊された、俗悪な反ユダヤ週刊紙として知られている。1933年からは図4に描かれたように、全国どこの街角でも専用ケース(掲示板)が設置されいやでも人目に触れるようになり、ポグロムを盛んに挑発するようになった。なお、シュトライヒャーは図3の文章にもあるように、1935年に制定された人種法であるニュルンベルク法の起草に関わり、自らの主張を法律に反映させている。⁽¹⁷⁾

また、この本はドイツの初等教育の初学年(6歳)を対象とした副読本で、実際にこれを手にしたドイツ人少女の写真も残っているが、エーリカ・マンによれば「攻撃性の少ない帝国教科書を外国に示すことは総統の『戦術』」であり、バウアーの本のような半ば公認の「子ども読本」によって、ナチスの真に意図するところが教えられると指摘している。⁽¹⁸⁾



Der Deutsche ist
ein stolzer Mann.
Der Deutsche
und der Deutsche
Mann ist
und soll
sich zeigen
sich der Deutsche!

Das ist der Deutsche, der sich immer
der größte ist im jungen Mann!
Er meint, dass er der größte sei
und ist stolz auf sich!



ドイツ人は衰退していくと、あなたは考えますか？

ドイツ人とユダヤ人とを比べてご覧なさい。

よく見て、ここに両方の絵がありますよ。

そんなこと分かり切ってますよね、ドイツ人が繁栄しユダヤ人が減んでいくことぐらい。

ドイツ人は誇り高く、働き戦います。

遠い昔より勇気に満ちあふれ、立派だからです。

ユダヤ人は、そんなドイツ人を憎んでいます。

これがすぐに分かるユダヤ人の姿です。

全国にこんなならず者がたくさんいますよ。

自分ではハンサムだと自惚れていますが、実際は何て醜いんでしょう。

〔図2 ドイツ人とユダヤ人の違い〕



sub ist der 8. April 1941!

他にもたくさんユダヤ人は騙す方法を知っています。

悪魔の血が駆り立てているのです。

おまけに彼らは不実なので、ドイツ人を嘲笑っているのですよ。

だけど、すぐにそんなことはなくなるでしょう。

一人の闘士が我々の間から立ち上がり、フランケン地区に現れたからです。

私たちは彼に感謝しなければなりません。

なぜなら私たちの国土を健全に、ユダヤ人たちの汚れから清めてくれるのですから。

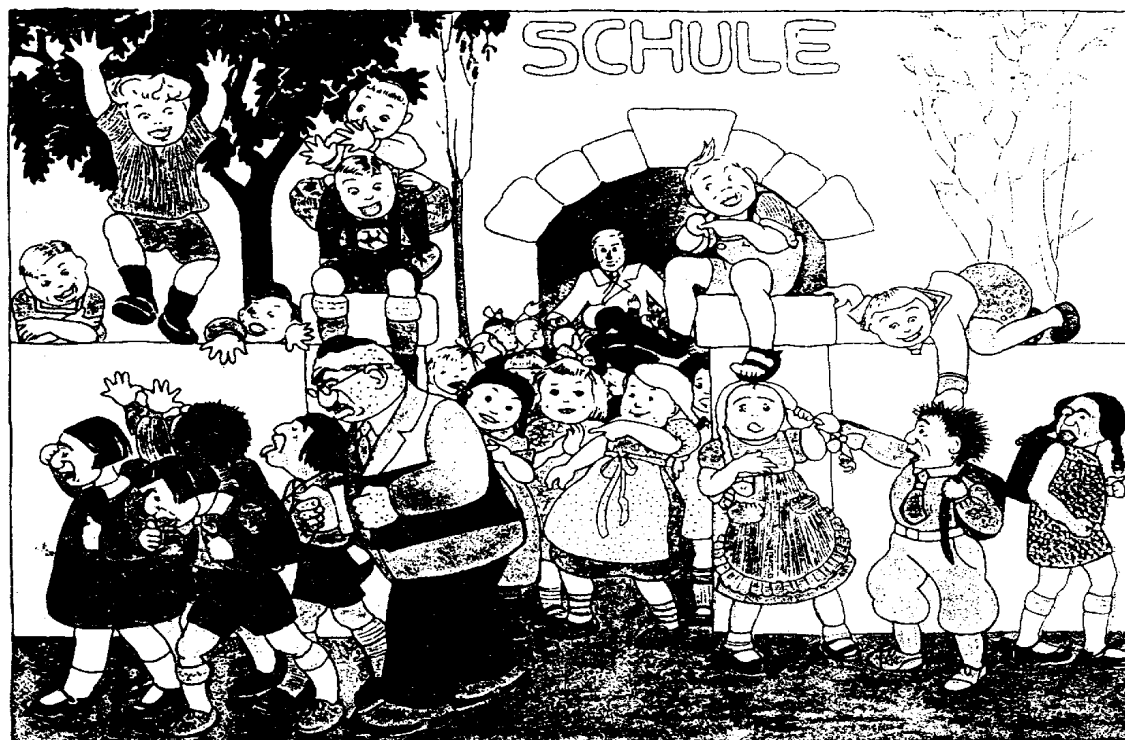
彼は全てのユダヤ人に、健全な国家のすばらしさやドイツ魂を、ユダヤ人とドイツ人の違いを思い知らせました。

〔図3 ユリウス・シュトライヒャー〕



彼はシュトゥルマー新聞を発行しました。
 だからユダヤ人は彼をとて憎んでいるのです。
 ユダヤ人たちは悔しがって遠吠えしていますが、
 シュトライヒャーはそんなこと気にもしていません。
 何年もの間、彼は血の純潔のために戦ってきました。
 世界中がそれを知っています。
 アメリカの新聞ですら、彼の記事をしばしば載せます。
 いかにユダヤ人が憎悪を持って害毒を撒き散らしているかを。
 西でも東でも、もはやそれは世界中で叫ばれています。
 だからユダヤ人たちは悩んでいるのです。

〔図4 シュトゥルマー新聞〕



今やすべてのユダヤ人が学校から出ていかなければならないので、私たちの学校はどんなにすばらしくなるでしょう！
大きな者も小さな者も、わめこうが泣こうが、無駄なことです。
騒いだって、怒ったってだめです。出ていけユダヤ人！
私たちはドイツ人の先生から学びたいのです。
ドイツ人の先生は、私たちを賢明な道に導き、一緒に散策し、
遊びながら鍛え、秩序が身に付くようにしてくれます。
そして勉強が喜びになるよう、陽気に朗らかに接してくれるのですから。

〔図5 学校からのユダヤ人追放〕



私たちの郷土、

そこは美しさや力強さを通して私たちを健康にしてくれる特別な田園がたくさんあります。

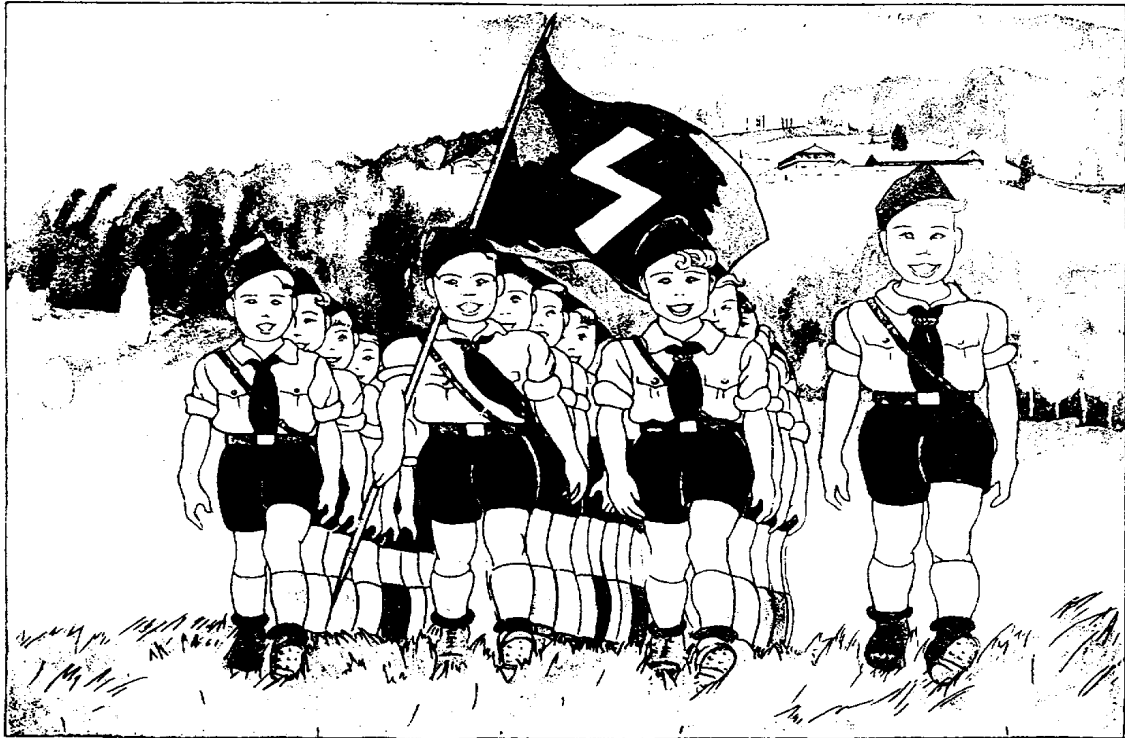
だから多くの人々が国中のいたる所から訪れてみたいと熱望しているのです。

この絵の中に看板が立っているのが見えるでしょう？

これはすべての人々に対して、ユダヤ人はここに居てもらいたくない、ドイツ人だけが息を吸える場所なんだと、わかりやすく知らせているのです。

だから小さなユダヤ人たちよ、立ち去りなさい！

〔図6 ユダヤ人お断わり〕



自分が純粋なドイツ人だと思う若者は、ヒトラー・ユーゲント活動に参加しましょう！

自分の生活を総統に捧げ、未来のために努力を惜しみません。
ヒトラー・ユーゲント活動が偉大で強大なものになった時には、
ドイツの遺産を受け継ぐことができるのです。

私たちの郷土は偉大であり続けましたし、これからもそれが絶えることはないでしょう。

この絵の中に、誇り高く美しいヒトラーの若者たちを見ることができますね。

大きな者から小さな者まで、彼らは皆遅しくて真っすぐな同志たちです。

彼らはドイツを愛し、よそ者のユダヤ人を軽蔑します。
だからユダヤ人は引っ込まなければならないんですよ。

〔図7 ヒトラー・ユーゲント〕

図2や図7に描かれ説明されているように、バウアーは単にユダヤ人に対する憎悪のみを訴えているのではない。それに加えてドイツ民族、郷土に対する誇りや愛着、ドイツ人の優秀性や偉大さを高らかに歌い上げており、その確信ゆえに図5や図6において、ユダヤ人を締め出していくことに対して、何の躊躇いもなく無邪気に描くことができたのではないかと考える。

(3) シュトゥルマー新聞に投書された子どもたちの声

バウアーの描いた教科書に加えて、当時のドイツの子どもたちの世界観を知る上で、シュトゥルマー新聞は有効な教材と成り得る。そこにはナチスの方針に共感を示す多くの子どもたちや教育関係者からの投書が掲載されていた。

例えば1935年の35号では小学校の校長であるマックス・ブルケルトという人物の手紙が載せられており、彼の9歳の生徒の話が次のように紹介されている。⁽¹⁹⁾

「私はあなたの素晴らしい闘争新聞『シュトゥルマー』から、かつてドイツを支配した多くのユダヤ人指導者の記事を切り抜き、同封の写真でご覧いただけるように、スクラップを作りました。私はこのような図版を用意して、学校の上級学年すべてにユダヤ人問題について話をします。このやり方がすでに大変効果を上げている様子は、9歳の生徒の次のような話からお分りになるでしょう。

ある日、この9歳の生徒が学校で、こう語りました。先生、僕は昨日お母さんと散歩に行きました。僕らがユダヤ人のデパートの側を通りかかった時、お母さんはより糸の小さな巻き玉を少し買おうとしました。お母さんは僕にお金を渡し、デパートでより糸を買ってくるように言いました。そ

れで僕はお母さんに、こう言い返しました。『僕はデパートに入らない。自分でやらなくちゃ。でも言っとくけど、お母さんがデパートに入ったら、僕は明日先生に言うからね。お母さんは学校に呼ばれて、ひどいめに会うよ』と。

もしあなたが同封の写真を気に入り、それを『シュトゥルマー』で公開して下さいますなら、子どもたちはとても喜ぶと思うのですが。私は、その写真が士気を鼓舞すると確信しています。

激しい戦いの中で、さらに鋼鉄のように硬い神経を望みつつ、ご挨拶まで、ハイル・ヒトラー。学校長マックス・ブルケルト」

また、1935年の2号では、エルナ・リスティングという少女が自分の書いた自慢の作文を掲載するよう頼み、それが実現している。⁽²⁰⁾

『『シュトゥルマー』さま！

大管区指導者シュトライヒャーがユダヤ人についていろいろ教えてくれましたので、私はユダヤ人を憎悪します。私たちは学校で『ユダヤ人は私たちの災厄だ』と題する作文を書きました。この私の作文を載せていただきたいのですが。

作文『ユダヤ人は私たちの災厄だ』

残念ながら今も、みんなは『ユダヤ人はなにしろ神の創りたもうた者だ。だから、お前たちはユダヤ人をやはり尊敬しなければならない』と言います。でも、私たちはこう答えたいのです。『害虫もやっぱり動物だけど、私たちはそれを根絶やしにする。ユダヤ人は雑種だ。アーリア人とアジア人と黒人とモンゴル人の遺伝子を持っている。雑種では悪が支配するものだ。ユダヤ人の唯一善なるものは、白い肌の色である』と。

イエスはかつてユダヤ人たちに、『お前たちの父は神ではなく、悪魔である』と言いました。だからユダヤ人は悪の法典を持っており、これがユダ

ヤ教の教典なのです。ユダヤ人も私たちを動物だと思って、そのように扱うのです。ユダヤ人は私たちからとても巧妙にお金や財産を巻き上げます。ゲルゼンキルヒェンでは、ユダヤ人のグリューンベルクが腐った肉を売りつけました。法典に従って、彼にはそれが許されるのです。ユダヤ人たちは暴動を企み、戦争を煽り立てました。彼らはロシアを不幸にしたのです。ドイツでは、彼らはドイツ共産党にお金を与え、殺人者たちに礼金を払いました。私たちは死に瀕していました。その時、アドルフ・ヒトラーが現れたのです。今、ユダヤ人たちは外国にいて、私たちへの憎悪を煽っています。でも、私たちは惑わされません。総統に従うのです。私たちはユダヤ人の店で何も買いません。彼らに1ペニヒでも払えば、それが私たちの一員を殺すことになるのです。ハイル・ヒトラー！

エルナ・リスティング」

さらに、同年の紙上には、ヘルガ・ゲルビングという9歳の少女の作文も掲載されている。⁽²¹⁾

『カッコウとユダヤ人』

カッコウは鳥の中のユダヤ人です。外見や行動の点でカッコウはユダヤ人に大変似ているからです。カッコウの曲がたくちばしからユダヤ人の鷺鼻が連想できます。カッコウの足は短く、ひ弱なので、カッコウは上手に地上を走れません。（それに対して、ドイツ帝国紋章の鷺の歩き方は周知のように機敏である！）同じようにユダヤ人の歩き方も、決して美しくありません。カッコウは『カッコウ、カッコウ』と啼く時、ユダヤ人の商人と同じようにいつもお世辞を言っているのです。ユダヤ人の商人が、ドイツ人に彼の店で買い物をさせようと、慇懃に振る舞うように。鳥と人間の中の二つのユダヤ人は、寄生動物なのです。彼らは他人を犠牲にして裕福になり、肥えていくのです。

でも私たち人間は、鳥ほど愚かではありません。私たちはそんなことを我慢できませんし、あつかましい『カッコウ』を私たちの大地から追い払います。私たちロートの子どもは、お手伝いします。クラスの数名の者は、ときどき百貨店ベアーの側に立って、人々が中に入って行こうとすると、こうわめき散らすのです。『恥を知れ、ユダヤ人の所で買い物なんかして、ちくしょうめ!』と。そうしたら女の人たちは顔を真っ赤にして、引き返してしまうのです。

『シュトゥルマー』、これ気に入ったでしょ。ハイル・ヒトラー!

ヘルガ・ゲルビング」

いずれもまだあどけない小学生たちが、ユダヤ系商店・百貨店での不買運動に協力しようとする積極的な姿勢が見えるが、どこか遊びを楽しむかのような感覚が伝わってくる。

シュトゥルマー新聞が、こうした子どもや教師の声を重視しているのには理由がある。それは発行者のシュトライヒャー自身、かつて小学校の教師をしており、この新聞を学校における教材として活用してもらいたいとの意図が働いているためと考えられる。そして、実際教室内にこの新聞が持ち込まれて授業が行われていた。

その様子をエーリカ・マンは次のように描写している。⁽²²⁾

「ナチは不幸な者たちを『人種理論』の生ける事例としてしばしば利用しようとする。例えば、一人のユダヤ人の子どもが教師の所へ呼ばれる。彼は青ざめて震えながら、学友たちの前の教壇に立つ。だが、この学友たちは彼の仲間であってはならないのだ。いまや『ユダヤ人種の特徴』が、その子どもを手本にして説明される。『君たち、この顔に何が見えるか?』と教師は質問する。子どもたちは、たとえ『モデル』が実際にどのような容貌であろうと、『シュトゥルマー』から学んだ通りに答える。『大きな鼻、厚

ぼったい唇、粗悪な縮れ毛です』と。彼らには、ユダヤ人の子どもの暗い目に浮かぶ涙は見えないし、その瞬間に堪え難く、忘れ難い仕打ちをこの子にしていることに気づかないのだ。『そのほかに何が見えるか?』と教師はさらに問う。子どもたちが何も言わないので（子どもたちでさえ、残酷な仕打ちの限界を知っているのだから）、教師は結論として『卑劣で詐欺師のような表情を見ているのだよ』と教えるのである。

ユダヤ人の子どもは、よろけながら自分の席に戻る。だが『アーリア人の』生徒たちは、これが授業の目的なのだが、生ける対象で『人種の特徴』を勉強すると同時に、『非アーリア人』の扱い方を学ばねばならないのである。」

これがシュトゥルマー新聞をもとにした人種の授業実践であった。ただし半ば公認であったとはいえ、この新聞を活用することは正規の教育プログラムには含まれてはいない。積極的な教師にとっては、教材の宝庫として十分な成果をあげたと考えられるが、公のレベルではどのようなであったのか、教材として提示しておく必要を感じる。

（４） ナチスの教育政策

そこでまず挙げられるのが、ベルンハルト・ルス博士が、1935年にナチス党人種局との合議によって作成し制定された「帝国文部省条令」である。⁽²³⁾ この内容をまとめたものが以下のものである。

「人種理論の授業は、今後あらゆる学年で行われる。公的生活と私的生活のすべての領域は人種理論から逆に引き出されなければならない。国家社会主義的精神の全般的強化が、これによって達成されねばならないのである。重要なのは以下の点である。

- 一 遺伝・人種理論に関する一切の基礎的事実の関連、根源および影響を生徒に認識させること。
- 二 国家の全体性と政府の目標に対する遺伝・人種理論の意義を生徒に納得させること。
- 三 先祖、現在の世代および将来の世代という系列からなるような、国家の全体性に対する責任感を生徒の中に覚醒させること。ドイツ民族は北方人種の最高の代表者であるという誇りで、生徒を満足させること、またドイツ民族を余す所なく北方化する際に、生徒に積極的な協力の気持ちを起こさせること。

これらすべては、すでに第一学年で行われなければならない。こうやって、いかなる学童、いかなる少年少女といえども純粋な血の意義と必要性を十分に学習することなく、学校を卒業してはならないと要求した総統の願いが実現される。」

また、1937年の雑誌『国家社会主義教育制度』1号では、「人種学授業における直感と図像」と題する論説が述べられている。⁽²⁴⁾

「子どもは異質な特徴を良く理解するものだ。したがって、まず子どもに人種的に優れた同種族の人間の図像と一緒に、異質の代表格である異人種の図像を見せれば、子どもはドイツ民族が人種的に同族であることを最も良く自覚するであろう。この場合、ユダヤ人に関して、重要なのは次の点である。ユダヤ人の負の人種的淘汰の不快な特徴を表現するタイプがとくに選ばれるべきであり、支配民族へ外見上ある程度適応したような代表者が選ばれてはならない。卑屈さと葛藤が表情に現れているような、ユダヤ人や混血人種の図像が主に展示されるべきである。とりわけ、ユダヤ的・ボルシェヴィズム的な『政治家』と犯罪者は、有益で大変見事な資料を提供してくれる。」

さらに人種理論の専門家、エルビング・ドーバース教授は、著書『ユダヤ人問題—学校での資料と取り扱い』の中で次のように述べている。⁽²⁵⁾

「われわれは、わが民族をどのように見せたいのか？二つのグループの図像を並べてみよう。一方は北方的規定の身体と顔つき、スポーツマンタイプ、オリンピック選手、将校タイプ、指導者像であり、他方は—ありふれた者であろうとも—ユダヤ人の集団、あるいはユダのいわゆる『偉人』、例えば多数のボルシェヴィキの指導者、ローザ・ルクセンブルク、ヒルファード・ディング、…およびこの類の者である。

まさしく二つのタイプが収集されれば、子どもたちはきっと純粋に前者のタイプに好感を持ち、後者のタイプを強く拒否する気になるだろう。このような直感と自種族意識および他種族意識を繰り返し強固にし、それを知識と認識の両面から定着させることが、教師の授業課題である。」

いずれのものからも、シュトゥルマー新聞と大差ないような、意図的に誇張された「醜い」ユダヤ人像を印象付けることが重要であり、そのような「劣った人種」との「違い」を強調することによって、「ドイツ民族は北方人種の最高の代表者であるという誇りで、生徒を満足させること」が重要視されていることは注目に値する。

こうした公式・非公式の教育が子どもに及ぼした影響の大きさは計り知れない。それゆえ授業においてドイツの子どもたちが「踊らされた」側面について学ぶことは必要だが、注意したいのは責任の追求を授業の主題とはしていないという点である。実際、責任の所在は教育や大人にあるのは明らかであり、それを非難することは容易だが、それによって先述した青少年自身が「何に踊ってしまったのか」を考える妨げになる恐れもある。

冷静に見ればナチスの一連の教育政策には、子どもを「誇り」で満たそうとする姿勢が見られ、それは子どもの側でも歓迎すべきものであったと

言えるのではないか。むろん白バラ活動のショル兄妹のように、途中でその欺瞞性に気付いた場合もあり、一概に決め付けることなど出来ないが、子どもの「満足感」に迎合することによって、偏見を偏見と感じさせない状況が生み出されていったと考えるならば、子どもの主体性を軽視してはならない。この点に注意して、教材として活用する必要があると考える。

(5) ホロコーストの論理

さらに、エスノセントリズムに囚われた世界観の延長線上に、ホロコーストの論理を位置付けることが可能ではないかと考えて、教材化を行った。その論理とはすなわち「生きるに値しない生命」という考え方である。

既に見てきたように、ドイツ人はユダヤ人を一方的に「劣ったもの」と決め付けていたが、何が「優れて」何が「劣って」いるのかという基準が、自民族中心的な根拠に基づいたものでしかなく、言い換えれば多数者が少数者に対して恣意的に決定したものであった。そして「劣った者」=「生きるに値しない生命」と見なすことに、優生学という「科学」が「お墨付き」を与えてしまったと言える。

そこで、かつては隆盛を極めたにもかかわらず、ナチズム以降すっかり表面的には鳴りを潜めてしまった優生思想について、概説的な資料を教材として準備した。それが、次の朝日新聞が特集した「100人の20世紀」に取り上げられた「アドルフ・ヒトラー」の記事である。⁽²⁶⁾

『あらゆる世界史的事件は、人種の自己保存衝動の表現にすぎない』と、ヒトラーは自著『わが闘争』で述べた。人種や民族の生存競争、優勝劣敗を固く信じ、他民族に寄生するユダヤ人は全民族の敵だと攻撃した。さらに、こう語る。『人種の純粹保持のために、ただ健全であるものだけが子供を生

むべきだ』

『健全』への狂信の最初の標的となったのは、精神障害者たちだ。政権について半年後に、ヒトラーは『遺伝病子孫予防法』をつくった。障害者たちが子孫を残さぬよう不妊手術を強いる断種法である。(中略) 第二次世界大戦が始まると、ヒトラーは次のステップに踏み切った。障害者本人を安楽死の名の下に抹殺する『T4計画』である。ドイツ西部のハダマー精神病院に当時のガス室などが残っている。シャワー室に見せかけた密室に裸の患者を押し込み、毒ガスを放出する大量殺人の手法は、この計画で開発された。犠牲者の脳は研究用に解剖台で取り出された。殺人を正当化したのは『生きるに値しない生命』『社会資源浪費の防止』といった論理だった。(中略) 対ソ戦が激化すると、T4計画の責任者は東方の収容所に相次いで転任した。大量殺人技術を、今度は全ヨーロッパのユダヤ人に対して転用しはじめたのである。T4計画に対しては、ドイツ国内で一部の勇敢なカトリック司教らが抗議の声を上げている。しかし、ユダヤ人が町から消えていくとき、人々は、見て見ぬふりをした。(中略)『劣った遺伝形質』を持つ人間を、出産制限などで減らすべきだと考える『優生学』もまた、二十世紀前半の世界の流行だった。アメリカの一部『先進州』では、もう不妊化政策が実行されていた。選別の思想は、決してヒトラー一人の独創ではなかった。人間の持つ心の暗部を、ヒトラーはただ、極端に拡大して見せただけなのかもしれない。」

この中では、障害者に対する政策との関連性や、アメリカでの実施などについて触れられており、問題が拡散してしまう可能性もあるが、逆に現在でも出生前診断や遺伝子操作の中に、同質の問題点を見出だすことが出来る点に触れるべきかもしれない。あるいは、人間の優劣とは一体何であるのかという根源的な問いを投げ掛けてみるべきであろうか。

(6) ヒトラー・ユーゲント体験者の回想

最後に、ナチズムの時代に青少年期を送ったドイツ人が、現在ではかつての自分自身をどのように振り返っているか、という教材を提示するべきであると考え。

しかし、自ら積極的にナチズムの運動に参加したことを明らかにしたドイツ人の文章は多くはない。それは大変な困難が伴うであろうし、自らもまた「被害者」という立場に身を置く方が、実生活を営む上で支障がないことは想像に難くない。そうした状況の中で、白バラ活動により処刑されたショル兄妹の姉で『白バラは散らず』の著者であるインゲ・ショルは、当時を率直に振り返って次のように語っている。⁽²⁷⁾

「ある朝のこと、私は学校の階段で、同級生の一人がほかの女の子たちに『とうとうヒトラーが政権をとったのよ』と言うのをききました。そしてラジオもどの新聞も、『今やドイツ国内万般向上するの秋、オールを掌握したヒトラー』と報道しておりました。生まれてはじめて、政治が私たちの生活にとびこんできたのです。ハンスは当時十五歳、ゾフィーは十二歳でした。私たちの耳には、祖国についてさまざまなことばが聞こえてきました。同胞とか、民族共同体とか、郷土愛とか。それは私たちを感服させ、私たちはそのことが学校や街頭で語られるのを耳にするたびに、感激して聞きほれました。だって私たちは、郷土をとっても愛していたのです。森や川や、また果樹園とブドウ山のあいだを急な斜面にそってうねうねとはしる年ふりた灰色の石垣。私たちは郷土というと、もうすぐに、苔や、しめっぽい地面や、ふくよかなリンゴのにおいを感じたのです。そしてそこ、足をふむ限りの土地は、私たちには親しいなつかしいところでした。祖国、それはことばを同じくし同じ民族に属するすべての人の、拡張された郷土ではな

かったでしょうか。ですから私たちは、なぜとはいふことなしに国を愛しておりました。もちろんそれまでは、こんなことをあげつらうということはありませんでした。けれど今、今こそ空たかく、大きく輝く文字で祖国とするされたのです。そしてヒトラーが一いたるところで私たちの聞いたことは―ヒトラーがこの祖国を偉大・幸福・繁栄へもたらすべく努力をする。彼は各人が仕事とパンを得るべく心を悩ませて、ドイツ人一人一人がその祖国にあって一個の独立・自由・幸福な人間となるまでは休み楽しむことがない、というのでした。私たちはこれはよいことだと認め、私たちとしてもよろこんで協力しようと思いました。だが、さらにある別なことがこれに加わり、私たちを言いようもない力でひきつけ、ひきさらったのです。すなわち、腕をくみ隊伍をととのえて行進する青少年の姿、そのひるがえる旗や、前方を直視するまなざし、太鼓のひびきと歌声。これこそは、何か圧倒的なものではなかったでしょうか、この共同体こそは？それゆえ、私たちみんな、ハンスもゾフィーもその他みんながヒトラー青年団に加入したことは、不思議なことでもなんでもありません。」

こうした回想からは、当時のドイツの子どもたちが如何に理想に満ちてヒトラー・ユーゲント運動に積極的に加わっていったかが窺い知れるが、そうした一人でヒトラー・ユーゲントに属するドイツ少女連盟の女子リーダーであったレナーテ・フィンクは、当時彼女がどのようにユダヤ人を見ていたかについて語っている。⁽²⁸⁾

「ユダヤ人は私にとって、全ての〈悪〉―悪い考え、退廃した芸術や知性―の化身を意味していました。私は〈水晶の夜〉の出来事を、次の日になってから学校で聞きました。それで、もっとよく知ろうと努力したのですが、私がたずねた人はみな、ぎくっとして防御の身構えをとるか、私まで戸惑うようなあざけりの勝利を口にするかでした。私はそのことについて父と

話し合うことはできませんでした。何か途方もないようなことがあったとは感じましたが、それが何であるか実際には理解できませんでした。私は、あまりにもユダヤ人を敵視していたので、彼ら犠牲者を人間として、悩み苦しむ人間としては、もはや全く認識できなくなっていたのです。

同じことが、ロシア人の捕虜についてもいえます。私はメイドから『ロシアの収容所では、ロシア人同士、共食いをしている』と聞かされた時、『われわれはもうこの下等な人種にうち勝ったも同然だ』としか考えませんでした。この情報がまちがいかもしれないとか、これらの可哀そうな人々は、空腹からそんなことをしたのかもしれないなどとは全く思いもよりませんでした。その上私は、収容所をのぞき見るのが禁じられていたにもかかわらず、一度収容所に行ってロシア人を見てみたりもしたのでした。この陰気で、やせ衰えた人たちの姿はまさにあちこちで彼らについていわれている〈下等な人間〉というイメージにぴったりだったのです。彼らをそんなふうにしたのがドイツ人だなんて考えてもみなかったし、それは収容所送りされるユダヤ人の、骨と皮ばかりに痩せこけてボロをまとった姿を見たときも同じでした。

確かに、たった一度だけ一人のユダヤ人との出会いで胸うたれたことがありました。その少女とは、かつて一緒に学校に通ったこともあったのです。ある日、彼女は、黄色いユダヤ人の星印をつけていました。彼女は私に挨拶をし、私も彼女に挨拶し返しましたが、途端にギクリとしました。というのは、私はユダヤ人に絶対に挨拶などしてはいけなかったのです。彼女が私に投げかけたそのときのまなざしを私は決して忘れることはできないでしょう。そうして彼女は行ってしまいました。これは今日でもなお、私にとって苦い思い出となっています。

私はユダヤ人がポーランドに行き、そこで『仕事を習っている』のを知

っていました。けれどもある日私たちがまたも、収容所送りの光景を目にした時、同志—当時私たちは互いにこう呼びあっていたのです—の一人が私にこうささやきました。『彼らはポーランドで皆殺しにされるのよ。』私はぎょっとしました。けれどももし私がほんの少し前に出会ったあのユダヤ人少女のまなざしがなかったなら、私はむしろこの説明を忘れようとさえしたでしょう。私は当時一六歳でした。一六歳といえば、普通世間ではもうすでに十分に熟考できる若者と思われていました。けれど私はすでにある〈良心に対するいいわけ〉や〈理屈〉を持っていたのです。私は熟考しようとしませんでしたし、できもしませんでした。」

フィंकは率直に、ユダヤ人を「人間として、悩み苦しむ人間としては、もはや全く認識できなくなっていた」ことを認めているが、当時はそれを思い煩わずにすむ「良心に対するいいわけ」「理屈」を身に付けていたと説明している。それは「下等な人間」の「痛み」など関心を持つまでもないということであり、裏返せば優秀な支配民族としての誇りが、人間としての良心を凌駕してしまったと言える。

フィंकに対し、ドイツでは「きわだった道徳的な感受性」「稀にみる率直さ」という評価がなされており⁽²⁹⁾、彼女は同世代の中では例外的存在なのかもしれないが、自らの倫理的問題として捉えようとする姿勢は、ぜひとも伝えていくべきものではないかと考える。

4 授業「ナチズム下の子どもがみたユダヤ人」の展開

(1) アンネのみたナチスの迫害〈第1時限目〉

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>アンネ・フランクについて知っていることを挙げ、彼女の生涯について知る。</p> <p>アンネ・フランクが記した1942年6月20日付の日記を読み、ユダヤ系市民の日常生活の細部にわたって様々な法的規制が加えられていった様子を知る。</p> <p>そのような規制の連続に対して、ナチスの意図するところは何であったのかを話し合う。</p> <p>ドイツでは、ニュルンベルク法をはじめとする諸法令による「ユダヤ人」の定義、財産収用（資産のアーリア化）を経て、社会的接触</p>	<p>ホロコーストのみに関心が集中しがちな生徒の目を、ホロコーストが始まる以前のユダヤ系市民の日常世界で繰り広げられた迫害に対して向けさせる。</p> <p>【プリント配布】</p> <p>ドイツ本国同様、ナチス支配下のオランダにおいても、ユダヤ系市民から市民権を次々と剥奪し、社会から排除・孤立化する措置が取られた様子を、段階を追って理解できるようにする。</p> <p>ナチスによる「ユダヤ人」の定義の根拠が「人種」という言葉から連想する明確な形質的特徴ではなく、先祖の宗教という非科学的な</p>

<p>の断絶から隔離・強制収容へと、「合法的」に迫害が進行していったことを知る。</p> <p>ナチスはユダヤ系市民を、「よそ者」「異質なもの」に仕立てて排除し、民族共同体国家の建設を目指したことを知る。</p>	<p>ものであったことに留意し、ナチスが「ドイツ人（アーリア人）」と「ユダヤ人（非アーリア人）」の区分を創出し、それを後から「科学的」に実証しようとしたことに注意する。</p>
--	--

(2) バウアーが描いたユダヤ人とドイツ人〈第2時限目〉

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>「ユダヤ人お断わり」の看板が掲げられたプールの入り口で佇む3人のユダヤ人の少年の写真をもとに、1時間目に学習した内容を復習する。</p> <p>日常世界で行われていたユダヤ人への迫害に対し、ドイツ人がどのような感情を抱いていたのか想像してみる。</p> <p>1936年にドイツで出版された、</p>	<p>【写真の掲示】</p> <p>今でこそ「残酷な」仕打ちと受けとめられるが、微笑んでいるようにも見えるプールの管理人の表情から、彼がどのような気持ちでいるのか、非ユダヤ人の視線で考えられるようにする。</p> <p>【漫画の提示】</p>

"Trau keinem Fuchs auf grüner
Heid und keinem Jud bei seinem
Eid" (野原の狐なんて信じるな
宣誓をしたってユダヤ人なんて信
じるな) という漫画教科書を見て
著者のエルビラ・バウアーという
当時18才のドイツ人少女が描いた
ユダヤ人を追い出すドイツ人の「
いい気味だ」という表情を読み取
る。

なぜ迫害されるユダヤ人に対して
同情ではなく冷淡な感情を抱けた
のか、その理由を想像し、話し合
って発表する。

さらに漫画の後半部分を見て、バ
ウアーがどのような民族感情の持
ち主であったのかを考え、当時の
ドイツの青少年の間には、ドイツ
民族こそ優秀であるとする自民族
中心的な考えが広まっていたこと
を知る。

同じ情景を見ても立場が異なれば
同じように見えるとは限らないこ
と、当時のドイツ人の多くがユダ
ヤ人を自分たちと同じ人間として
見てはいないことに気付かせる。

バウアーの描くユダヤ人の姿が、
意図的に誇張されて憎悪や偏見を
煽るものであることに十分注意し
て、かえってユダヤ人に対するス
テレオタイプを生徒に持たせるこ
とがないよう配慮する。

【漫画の提示】

(3) シュトゥルマー新聞とナチスの教育〈第3時限目〉

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>再びバウアーの描いた漫画をもとに、ドイツ中に掲示されたシュトゥルマー新聞とその代表のナチス幹部ユリウス・シュトライヒャーを見て、彼がドイツ人の子どもたちにナチスのユダヤ人観を教育しようとしたことを知る。</p> <p>バウアーの本もまたこの新聞社から出版されたことを知り、その影響力について考える。</p> <p>ドイツから亡命したエーリカ・マンが1938年に著した本の抜粋を読み、当時ドイツの学校でユダヤ人生徒に対してどのような仕打ちがなされていたのか、また実際にシュトゥルマー新聞の偏見に満ちた絵や文章が教材としてどのように用いられていたのかを知る。</p>	<p>【漫画の提示】</p> <p>【写真による補足】</p> <p>【プリント配布】</p> <p>マンが、一度「劣等人種」のレッテルが貼られてしまうとステレオタイプ化されたユダヤ人像の否定的イメージに囚われ、事実を客観的に判断できない状態に陥ってしまうことに対し、警鐘を鳴らしていることに注目する。</p>

<p>実際に1935年のシュトゥルマー新聞に投書された教師や9才の子どもたちの文章を読み、そこからユダヤ人に対する迫害に積極的に協力しようとする姿勢を読み取る。</p> <p>当時のナチスの教育方針もまたシュトゥルマー新聞同様、ユダヤ人に対する「醜く」「劣った」イメージを強調し、反対にドイツ人を「美しく」「優秀な」存在としてイメージさせることに腐心していたかを知る。</p>	<p>シュトゥルマー新聞が、教師や生徒の投書を盛んに掲載して、同紙を教材として教育現場で活用させようとする意図に注意する。</p> <p>【プリント配布】</p>
--	---

(4) 優生思想とエスノセントリズム〈第4時限目〉

学 習 活 動	指導上の留意点・資料
<p>ナチスのユダヤ人に対する「最終的解決」が1942年のヴァンゼー会議で決定され、国家政策としてユダヤ人の虐殺が開始されたことを知る。</p> <p>ユダヤ人の抹殺に対して、優生学</p>	<p>【プリント配布】</p>

という「科学」が「正当化」に役立ったことを資料から読み取り、そのどこに問題があるのか、意見を挙げて話し合う。

ナチスは優生学をもとに、ユダヤ人を「劣ったもの」として「生きるに値しない生命」と決め付けたが、何が「優れて」何が「劣って」いるのかという基準が、自民族中心的な根拠に基づいたものであり、多数者が少数者に対して恣意的に決定したものであることを理解する。

最後にヒトラー・ユーゲントの少女団リーダーだったレナーテ・フリンクが16才当時を振り返って回想した文章を読み、ユダヤ人を「人間として悩み苦しむ人間としては、もはやまったく認識できなくなっていた」ことを知り、「良心に対するいいわけ」「理屈」とは何であったのかを考える。

ユダヤ人同様、シンティ・ロマや精神病患者・障害者・同性愛者もまた「正常でないもの」、「不健全なもの」として抹殺の対象となったことにも留意する。

【プリント配布】

「下等な人間」に対する蔑視と表裏一体の支配民族としての優越感を、国家が率先して扇動しただけではなく、多くのドイツ人の青少年が、それを主体的に受けとめていたことにも留意し、自民族中心的な考え方に囚われることの危険性について想起できるように注意する。

おわりに

ユダヤ人に対する偏見を当時の史料の中に指摘することは容易だが、偏見を悪として糾弾するだけでは、そこから何ら学び取っていないのに等しいのではないか。それは、当時のドイツの青少年にとって、偏見と認識できるだけの判断力が働いていれば、ユダヤ人に加えられた痛みや苦しみに対し、同じ人間として無感覚ではいられないと思えるのに、教材として取り上げた彼らの絵や文章からは、やましさを後ろめたさのようなものが感じられない。それどころか明るく無邪気に楽しむかのような感覚が伝わってくる。一体それはなぜなのか、偏見とそれに基づく仕打ちを悪と認識せなかったものは何なのかを思考しない限り、史料を教材として生かすことにはならないと思う。

そしてその答えの鍵を私は、民族的優越感・誇りの高揚がもたらす満足感や幸福感にも似た感情に求めた。ネガティブなものを感じさせない、ポジティブな感覚があって初めて罪の意識などと無縁でいられたのではないだろうか。それゆえユダヤ人に対する偏見とドイツ民族の誇りとは表裏一体の切り離せないものとして捉える必要があると考える。

エルヴィラ・バウアーの絵本が出版されたのと同じ1936年に開催されたベルリン・オリンピックの記録映画『オリンピア』の中で、監督のレニ・リーフェンシュタールは、まさに光り輝くようなドイツの青年たちを撮影しているが、彼らこそ誇りに満ちあふれ栄光に向かって邁進するドイツの若者の象徴的な姿であったのかもしれない。

もちろんそれをバウアーの本同様、プロパガンダによって創り出された虚像と捉えることも可能だが、私はドイツの青少年を単にプロパガンダに「踊らされた」だけの受動的な存在とは考えたくない。彼らの責任を追求す

るためではなく、彼らもまた歴史の正当な構成員として、その主体性を尊重すべきであり、結果的に誤りであっても積極的に「踊ってしまった」ことの意味を問うべきではないかと考える。そのためには敗戦によって「誇り」が「驕り」であったと悟り、自らの価値観の崩壊を体験した人々が発する声に耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

私にはそのような人物の一人、ヒトラー・ユーゲント活動にのめり込んだレナーテ・フィンの回想文が、かつて少国民として「優等生」であった山中恒の著述と重なって見える。子どもでありながらも体制に協力・貢献したという自責の念と同時に、そのような子どもを育んだのは何であったのかと憤りを感じている点は、当事者である彼らに共通している。エルビラ・バウアーの消息は不明だが、もし戦後も生存していたとしたら一体どのような感慨を持ったであろうか。

このように、当時のドイツの青少年には、無責任な大人たちに扇動された側面と、民族的優越感に酔いナチズムの一翼を担った側面とが混在し、白黒の判別がつかないグレーな存在と言わざるを得ないが、そのような彼らを教材にすることは、これまで敬遠されてきたように思う。しかし、歴史の糾弾者として彼らを俎上にのせるのではなく、自らもまた同じ過ちを繰り返す恐れのある存在として、冷静に彼らが辿った道を見るならば、人間の良心を考える教材として学ぶべき点が多いのではないだろうか。

最後に目を現在の日本に移せば、まさに歴史教育をめぐって日本人としての「誇りの回復」を求める大合唱が行われている。それが実現すれば、どのような影響を子どもに及ぼすのか、異文化を持つ「他者」を蔑ろにする態度を生み出しはしないか、危惧を感じずにはいられない。偏狭な世界観に埋没してしまうことの愚を、ナチズムの時代を生きた子どもたちが語ってくれているのではないだろうか。

註

- (1) 昨年度の取り組みに関しては、拙稿「歴史教育におけるエスノセントリズムとの対峙ー日本統治下の朝鮮の教材化をめぐるー」『朝日大学教職課程センター研究報告 第9号』（2001年）を参照されたい。
- (2) 坂本多加雄著『問われる日本人の歴史感覚』（勁草書房2001年）の第3章および、あとがきより引用。
- (3) 高校における実践記録については、拙稿「現代史の取り扱いについてー大衆社会の視点からー」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第33・34集』（1996年）、同「日常性にみるファシズム」『未来をひらく教育107号』（全国民主主義教育研究会1997年）、同「現代史の取り扱いについて（2）ー現代社会の視点からー」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第35集』（1997年）等を参照されたい。
- (4) スタンレー・ミルグラム著『服従の心理』（河出書房新社1995年）のエピソードより引用。
- (5) 坂本の前掲書47ページより引用。なお、ハンナ・アーレント著『イェルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』（みすず書房1969年）を参照されたい。
- (6) エーリカ・マン著『ナチズム下の子どもたち』（法政大学出版局1998年）より引用。
- (7) メアリー・ミルズの同名の論文は、ミラーズビル大学のホームページ上（muweb.millersville.edu）で公開されている。
- (8) エディス・フェルマンズ著『エディスの真実』（講談社1999年）より引用。
- (9) ラウル・ヒルバーグ著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅 上巻』（柏書房1997年）を参照した。
- (10) マイケル・ベーレンバウム著『ホロコースト全史』（創元社1996年）を参

照した。

- (11) デボラ・ドワーク著『星をつけた子どもたち』（創元社1999年）より引用。
- (12) マイケル・ベーレンバウムの前掲書より引用。
- (13) 一例としてラウル・ヒルバーグの前掲書などを参照されたい。
- (14) アンネ・フランク著『アンネの日記 完全版』（文春文庫1994年）より引用。
- (15) この写真については、例えばアンネ・フランク財団編『目でみる「アンネの日記」』（文春文庫1988年）136、137ページで紹介されている。
- (16) 教科書のカラー写真は、アメリカ国立ホロコースト記念博物館のホームページ上（www.ushmm.org）で公開されている。
- (17) ユリウス・シュトライヒャーに関しては、芝健介著『ヒトラーのニュルンベルク』（吉川弘文堂2000年）に詳しい。
- (18) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (19) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (20) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (21) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (22) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (23) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (24) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (25) エーリカ・マンの前掲書より引用。
- (26) 朝日新聞1998年1月25日付け日曜版より引用。
- (27) インゲ・ショル著『白バラは散らず』（未来社1964年）より引用。
- (28) カール・シュッデコルプ編『ナチズム下の女たち』（未来社1987年）より引用。
- (29) カール・シュッデコルプの前掲書の中で紹介されている。

謝 辞

本研究にあたっては、宮田研究奨励金を交付して頂いた朝日大学理事会および理事長に対し感謝すると共に、多くの情報を提供して頂いたホロコースト教育資料センターに感謝の意を表したい。今後一層教育関係者や子どもが学ぶ場として、同センターが活用されることを期待したい。